

イラク議会選挙：中間発表を終えて

平成 17 年 12 月 24 日

大野元裕

12 月 15 日、イラクの本格政権を選出する議会選挙が実施された。イラクの政治プロセスの集大成となった今回の議会選挙の意義は大きい。本稿では、暫定的にイラク独立選挙管理委員会から発表された議会選挙中間発表について議論したい。

1. 選挙の意義と問題

政治プロセスの集大成を成し遂げ、信頼される政府を樹立し、イラクを安定させる上で、この選挙の意義は大きい。この意味で、選挙の実施にとどまらず、それに引き続く多くの課題が存在することもまた事実である。

- (1) イラクにおいては、王政時代から選挙が実施されてきた。この意味で、選挙自体よりも、選挙のあり方が重要となろう。イラク戦争が終結し、「自由」を強調されながらも「混乱」の印象を強めたイラク人にとっては、民主主義の恩恵を実感するために、民意を反映する選挙に参加することが重要となった。また、大量破壊兵器隠匿、テロリストとの関係、独裁者の排除と民主化を唱えて戦争に踏み切ったアメリカにとっては、最初の二つの戦争の大義に疑問が付される中で、民主化は残された「最後の砦」であり、来年の中間選挙前の駐留軍削減のためにも重要となったと言えよう。
- (2) イラクの政治プロセスの集大成となる今次選挙が、ある程度の平穏の中で実施されたことは重要であった。1 月 30 日に実施された暫定国民議会選挙が、治安面で大きな混乱を招き、いくつかの県で、多くの投票所が開設できなかったことと比較すれば、大きな進展と評価できるであろう。また、暫定国民議会選挙の際には、平穏のうちに選挙が実施されたとの当初の発表されたにもかかわらず、実際には数多くのテロ事件が発生していたことが明白になると、暫定政府に対する信頼はさらに低下した。今回の選挙では、治安面で一定の成功を収めた憲法の是非を問う国民投票時の経験を踏まえ、その際と同様に、国境閉鎖、都市間の移動制限、投票所近辺の自動車乗り入れ禁止、学校閉鎖、夜間外出禁止、不安な地域への重点的な治安要員配備、米軍増員等の措置が実施された。この結果、米軍と比較すればはるかに弱いテロ組織のゲリラ的攻撃を封じ込めることに成功した。この成功は、70%弱とされる高い投票率（投票時間は 1 時間延長）をもたらし、国民に政治参加の実感を与えることに貢献した。ただしそれは、重点的な治安措置が解除されると直ちにテロの被害が跳ね上がったことに見られるとおり、根本的な治安確保に成功したわけでも、政府に対する治安面での信頼が向上したことを意味するわけでもないようである。
- (3) 暫定国民議会選挙および国民投票の際には、多少の問題や不正は見られたようながら、イラク独立選挙委員会ならびに国連は、これらの不正は全体的な結果に影響を及

ぼすほどではないとの発表を行った。暫定国民議会選挙時におけるスンニー派地域での投票所の未開設やクルド地域での二重投票疑惑、国民投票時における白票・棄権票が最終発表ではカウントされなかったこと等、確かに問題はあったようだ。今回の選挙の中間結果を受けて、一部の政治勢力は、選挙監視団が機能せず、イランから投票用紙が持ち込まれたこと等を指摘し、選挙が不正に行われたと主張している。これらの不満は、連立政権作りや政府のポスト配分の際に解消される可能性はあるが、特定の勢力や国民の間に、一定の不信感を作る基礎になる可能性がある。

- (4) 戦後の政治プロセスの中で、今次選挙は、国民が参加する三度目の選挙となった。したがって、過去2回の選挙で実現されずに先送りされた課題がいかにも実現されるかが重要であったとも言えよう。先送りされた課題の内、最も重要な課題の一つは、宗派・民族対立の解消であった。過去のイラク政権は、イラク国民が有する複雑且つ根強い宗派・民族意識に鑑み、宗派・民族ではなく国民意識を前面に出す努力を行ってきた。過去の政権の政策とは異なり、戦後の選挙においてもっとも明白な特徴となったのは、宗派・民族意識が前面に打ち出されたことであった。イラクにおける宗派・民族対立に火がつけば、きわめて深刻な事態が予想される。このため、今次選挙では、宗派・民族対立をいかに乗り越えて、国民融和を成し遂げるかが重要な課題となった。国民融和に向けては、それぞれの勢力の利害を超越し、全体の利益を優先させる必要があったが、今次選挙は本格政権のあり方を決定付ける選挙でもあり、各勢力は自らの利益を最大化させる行動をとった。民族や宗派の利益が強調され、ネガティブ・キャンペーンが横行した。政治勢力間の小規模な衝突まで見られ、小規模政党党首の殺害まで発生した。後にスンニー派連合であるイラク合意戦線を形成することになるサーレフ・ムトラク等は、選挙を前にして宗派を縦断し、且つ有力な会派作りに奔走したが、合意はできなかった。国民融和は選挙後にまたしても先送りされた。

2. 選挙結果

(1) 選挙戦の様相

議会の総議席数は現在の暫定国民議会と同じ275議席である。その内の230議席は、1月30日の暫定国民議会選挙の選挙人登録数に応じて、各県に配分され、各県枠となった。残りの45議席は、第一に、各県枠では議席を得ることができなかったものの、全国的には一定の投票数に達していた政党に対する比例復活議席として割り当てられる。残った議席については、各県枠で議席を獲得した政党に対し、全国の獲得票に基づき配分されると規定された。

1月30日の暫定国民議会選挙は全国一区で実施された。このため、スンニー派が排除されて政治不安の原因のひとつとなった。また、宗派・民族内での競争が無かった結果、政策不在で、且つ宗派・民族の利益がもっぱら強調される選挙となった。これに対して今回の選挙では、各県枠が設けられたために、スンニー派参入のチャ

ンスが高まると共に、宗派・民族の分母だけで争われる選挙にははならなかった。その中でも今回の選挙では、諸派が混在する大都市の浮動票の行方が焦点となったようである。各県枠に割り当てられている 230 議席の内、実に約 4 割が、バグダード、ニノワ（モースル）およびバスラ県に集中し、これら諸都市の票の行方は、政権の行方すら左右するかに見えた。

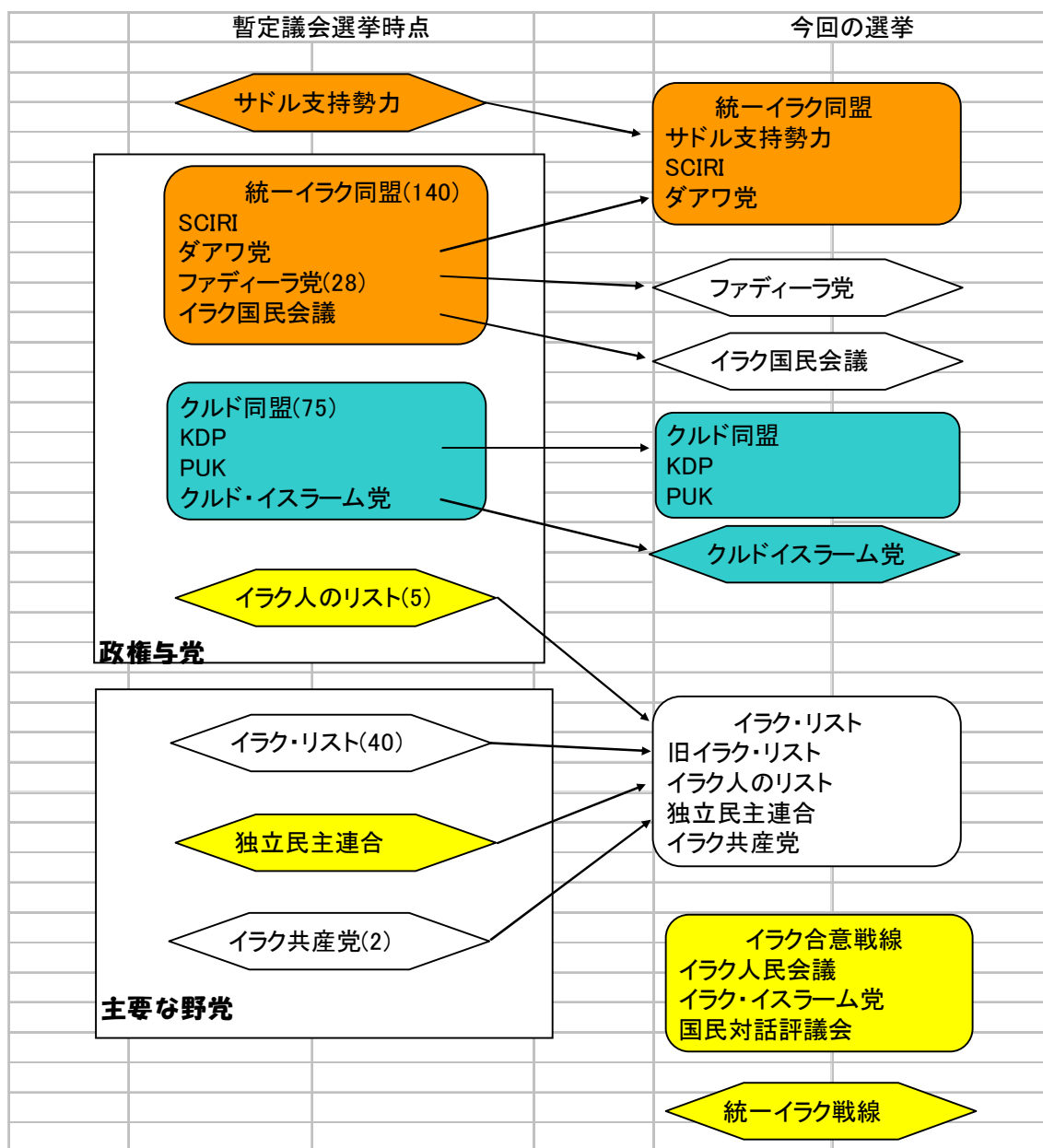
県名	議席数	
アンバール	9	スンニー派
バーベル	11	シーア派
バグダード	59	シーア派(サドル勢力、UIA)優勢
バスラ	16	シーア派(ファディーラ党)
ディヤーラ	10	シーア派優勢
ドホーク	7	クルド
エルビール	13	クルド
カルバラ	6	シーア派
ミーサン	7	シーア派(ファディーラ党)
ムサンナー	5	シーア派
ナジャフ	8	シーア派
ニノワ	19	スンニー派+クルド
カーディシーヤ	8	シーア派優勢
サラフ・ツィディーン	8	スンニー派
スレイマーニーヤ	15	クルド
キルクーク(タアミーム)	9	クルド+トルコマン
ジ・カール	12	シーア派
ワーシト	8	シーア派
小計	230	

また今回の選挙システムでは、比例代表復活制度が適用されて、小政党に配慮がなされているようにも見える。しかし実際には、大規模政党に有利に働きそうである。前回の選挙結果を適用しても明らかなことではあったが、比例代表復活制の恩恵を受けそうな党は、後述するようにごく少数であり、権別枠以外の 45 議席についても、多くの議席が大規模政党に行く可能性が高いように思われる。

(2) 会派・政党

今次選挙には議席数を上回る 307 の政党および 19 の政党連合が登録した。ただし、国会選挙と同時に実施された地方選挙において、それぞれ異なる会派で登録している政党もある。

今回は、暫定国民議会選挙に参加せずに、排除された感覚を強めたスンニー派系の政党として、イラク合意戦線とイラク統一戦線が参加した。スンニー派は、戦後まとまりを欠いてきたが、全体として、選挙に参加しなかった、あるいはできなかった結果、政治・経済両面で疎外され、権益から遠ざけられたと感じてきた。このことが新たな政党、会派の樹立に繋がったようである、スンニー派の政治参加は疑いもなく、国づくりに向けてプラスに他ならない。



与党を構成する最大勢力である統一イラク同盟（UIA）は、宗教色を強めた。UIAからは、チャラビー副首相が率いるイラク国民会議が外れ、この会派を構成する軸は、シーア派の宗教色が強いイラク・イスラーム革命最高評議会（SCIRI）とダアワ党になった。ここに、若手反米宗教指導者のムクタダー・アッ=サドル支持者が参加した。ただし UIA からは、これまでの獲得議席数の約 2 割を占めてきた親イラン系宗教政党ファディーラ党が離脱をほのめかしており、主要なシーア派宗教勢力を糾合する形をとりながらも、団結の度合いは低くなっている。またクルド連合からは、クルド・イスラーム党が離脱し、クルド・イスラーム連合の会派名で選挙に参加した。さらにヤーウィル元大統領が率いるイラク人のリストは与党連合から離脱して、イラク国民

リストに合流した。野党の中で最大勢力であったアラウウィ元首相のイラク・リストは、独立民主連合、イラク共産党、イラク人のリスト等を加えて、世俗色の強い野党連合を結成した。このような形の選挙戦は、宗派・民族という対立軸以外に、宗教勢力と世俗勢力という対立軸を与えることになり、注目された。

(4) 選挙の結果

12月20日の独立選挙管理委員会による中間発表の結果（各県別得票率）と、これを基にして、各県で100%の開票が行われたとして主要な会派が獲得するであろうと予測される議席数は以下の通りである。

県名	議席数	開票率	統一イラク同盟	イラク国民リスト	クルド連合	イラク合意戦線	クルド・イスラーム連合	ラーファイディン	リサーリユーン	国民対話戦線	解放対話集団	トルコマン戦線	イラク人民連	イラク国民会議													
バグダード	59	89.5	58.86	35	13.80	8	1.06	1	18.98	11			0.42	0	1.83	1	1.56	1	0.29	0	0.08	0	0.03	0	0.36	0	
バスラ	16	99	77.46	12	11.02	2	0.08	0	4.67	1			0.01	0	0.54	0										0.34	0
ジカール	12	99	86.63	10	5.03	1	0.06	0	0.43	0					2.9	0	0.08	0								0.32	0
バベル	11	95.9	75.74	8	8.79	1	0.11	0	5.69	1			0.01	0	1.63	0	0.54	0	0.13	0	0.02	0	0.02	0	0.35	0	
ナジャフ	8	98	82.03	7	7.80	1	0.08	0	0.05	0			0.02	0	4.02	0	0.05	0						0.01	0	0.38	0
カーディシヤ	8	99.5	81.38	7	8.54	1	0.10	0	0.26	0			0.01	0	1.46	0	0.04	0						0.03	0	0.73	0
ワースト	8	98.7	80.68	6	8.09	1			2.37	0					4.46	0	0.42	0				0.05	0	0.16	0		
ミーサン	7	98.9	86.86	6	4.33	0	0.05	0					0.01	0	3.38	0	0.04	0								0.27	0
カルバラ	6	98.7	76.02	5	11.72	1			0.29	0					2.66	0	0.05	0								0.46	0
ムサンナー	5	99.1	86.42	4	4.35	0	0.06	0	0.37	0			0.01	0	2.61	0	0.09	0								0.74	0
ニワ	19	87	7.44	1	11.17	2	19.20	4	36.88	7	0.25		1.10	0	0.15	0	10.11	2	2.78	1						0.21	0
ディヤラ	10	94.2	22.26	2	10.62	1	13.42	1	36.77	4	0.05		0.02	0	0.82	0	10.29	1	1.38	0	0.33	0	0.07	0	0.19	0	
アンバール	9	52.2	0.03	0	2.90	0	0.04	0	73.75	7			0.01	0	0.01	0	17.94	2	0.77	0			1.40	0	0.03	0	
サラーフッ=ディーン	8	98.1	7.38	1	10.69	1	4.22	0	33.67	3	0.06		0.04	0	0.13	0	19.32	2	9.33	1	2.38	0	0.18	0	0.11	0	
キルクーク	9	88.3	3.59	0	2.56	0	51.89	5	6.17	1	1.00	0	0.34	0	0.23	0	14.24	1	4.36	0	11.62	1			0.04	0	
ドホーク	7	93.6			0.60	0	89.97	6			7.34	1	1.23	0													
エルビル	13	80.4			0.40	0	95.15	12			3.24	0	0.26	0			0.05	0				0.19	0				
スレイマニーヤ	15	98.3			0.23	0	87.13	13			10.82	2	0.03	0													
小計	230			104	20	42	35	3	0	1	9	2	1	0	0												

中間発表の結果によれば、UIA が過半数に届かないものの、第一党になり、続いてクルド連合が議席を減らしながらも第二党となり、暫定国民議会内の与党が勝利する見込みである。また、スンニー派勢力がクルド勢力に匹敵する議席を獲得して議会に参入することになる。その一方で、世俗色が強く宗派を横断した野党側のイラク国民リストは議席数を半減させて、戦前の予想とは裏腹に大敗したと言えるのではないだろうか。

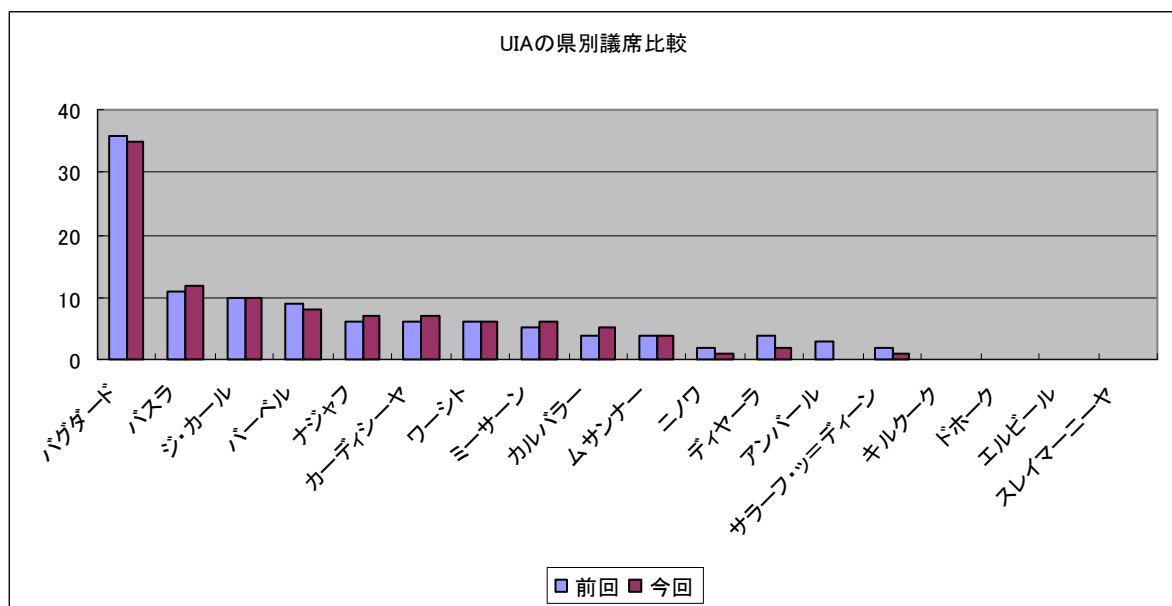
比例復活議席については不明であるが、少なくともサドル系のリサーリユーンは一議席を確保する見込みである。その一方で、チャラビー副首相率いるイラク国民会議は、各県枠で議席を獲得できない見込みどころか、比例復活でも苦戦しているようだ。

3. 現時点での分析と今後の見通し

(1) 選挙分析

今次選挙においては、ある意味では勝者不在になる見通しが高い。イラク国民リストならびにイラク国民会議の大敗は明白であるとしても、UIA は過半数の議席を維持できず、クルド連合は議席を減少させた。スンニー派政党は躍進したとは言え、排除される構図からいかに脱するかは見えていない。

それでも、UIA は検討したと言えよう。下の表は、1月の国民議会選挙で今回と同様の県別枠が適用されたと仮定して、今回の選挙と比較した UIA の議席数を示している（以下の前回の選挙との県ごとの比較はすべて、同様の仮定の計算に基づいている）。

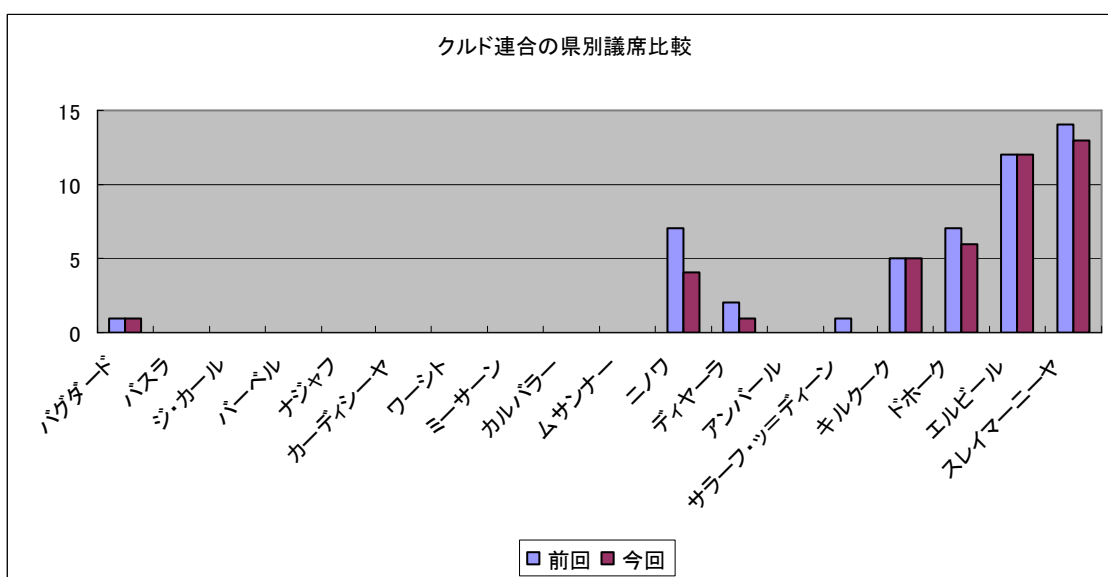


UIA は若干の議席を減らす見込みながらも、シーア派住民が数多く居住する地域では、しっかりとした基盤を有していることを示した。スンニー派地域での得票を新規参入のスンニー派政党に取られたのはいたし方あるまい。検討したと考えられるのは、シーア派がほとんど居住していないニノワ県を除く大都市を擁する選挙区であるバグダードならびにバスラ県における獲得議席数である。バグダードでは、スンニー派政党の参入、浮動票の行方の不透明さにもかかわらず、1議席を失うにとどまった。バスラにおいては、逆に議席を追加している。

この背景としては、浮動票層に対する明確なアピールが奏功したと考えられる。UIA に対しては、ラディカルな宗教色を忌避する票が逃げるのではないかと考えられた。しかし UIA は、世俗色を打ち出した有力政党に対するネガティブ・キャンペーンを徹底的に行った。この手法は、バアス党との関係という悪印象を持たれ、首相時代のナジャフやカルバラに対する政策で不評をかこったアラウィ党首の負のイメージと結びついた。またチャラビー氏に対する国民の不信感の強さは、イラク国民リス

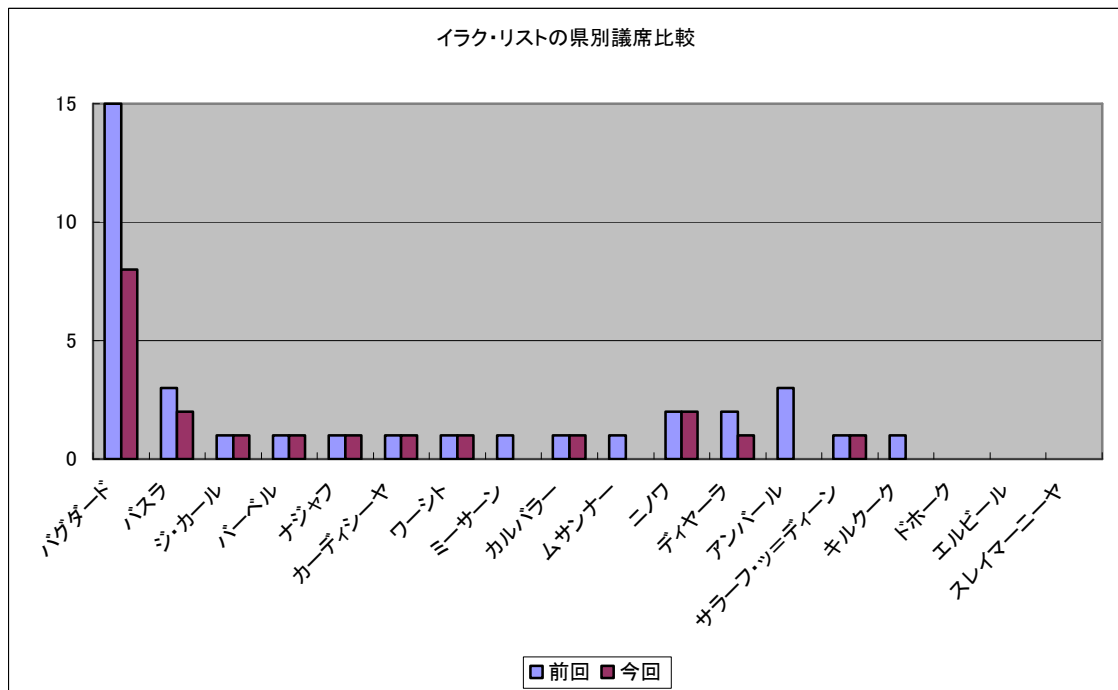
トから逃げた票を吸収させることを疎外したのではなかっただろうか。
 宗派・民族が問われる選挙が継続している中で UIA は、シーア派をまとめる上で最も重要な会派であった。不遇をかこってきたシーア派が政権の枢要を握ることができたのは、数的な優位を維持させるためにまとまったことにあった。このスンニー派と対照的なシーア派のまとまりをもたらしたのは、宗教に他ならなかった。シーア派の最高指導者であるシスターニー師が、事実上 UIA を支持する発言を行ったとされたことも大きかったであろう。UIA はそもそも、2003 年末から 04 年初頭にかけてのシスターニー師が主導した民主化・直接選挙実施要求を行った運動を支持した勢力により組織された会派であるが、シスターニー師の「亡霊」は今回も強力に働いたといえるのではないか。

UIA 主導の暫定政府は、国民の信を得るに十分ではなかったはずだが、目の前の生活の安定を最も希求する国民、特にシーア派にとっては、暫定政府の遺産を円滑に継承できる UIA は唯一の選択肢であったのかもしれない。イラクの安定には、軍ならびに治安機関がカギであることは言を待たない。治安部隊の強化は、イラクのみならず、米軍の去就にも影響を及ぼす問題でもある。この治安部隊であるが、現在でもその主力は与党参加政党の民兵である。ファディーラ党系民兵による英兵拘束事件、SCIRI 系民兵によるスンニー派政治家連続暗殺疑惑、クルド地域における治安部隊による強制移住や強硬な取締り等、さまざまな問題も発生している。しかしながら、ある意味でこれらの民兵の力が現状では重要になっていることも事実である。米政府がイラクからの撤退戦略を練る上で、さまざまな問題を黙認しながらもこれら民兵を頼りにせざるを得ないことも事態に拍車をかけている。目先の安定を第一に考えれば、現在の民兵を輩出する政党に頼らざるを得ない現実が存在している。



クルド連合からは、一部のクルド勢力が離脱したものの、クルド票の結束の強さは、今回の選挙でも明確に見られた。シーア派やスンニー派が多く居住する地域と比較して、クルド人が多く居住する地域においては、数少ない政党に投票が集中し、中でもクルド連合の得票率はきわめて大きい。それにもかかわらず、クルド連合が獲得議席数を減少させた背景には、今回の選挙制度がある。前回の全国一区の選挙制度では、投票率の高いクルド勢力はきわめて有利で、選挙をボイコットしたスンニー派が「割を喰った」分をクルド勢力が吸収したが、今回は選挙区の境界に獲得議席を制限された形になった。

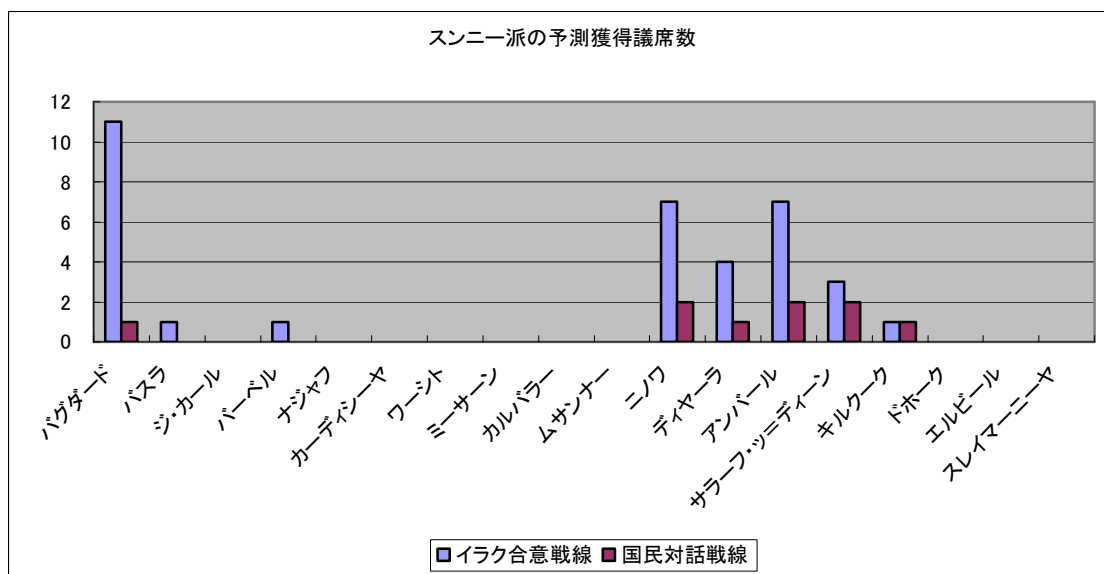
UIA の宗教化に対抗する勢力として反 UIA 勢力を糾合したイラク国民リストは、親米世俗政権を望む米国の報道に引きずられるかたちで、一部においては第一党として 80 議席を獲得するのではないかとすら言われた。しかしながら、結果として今回の選挙において大敗した政党となった。



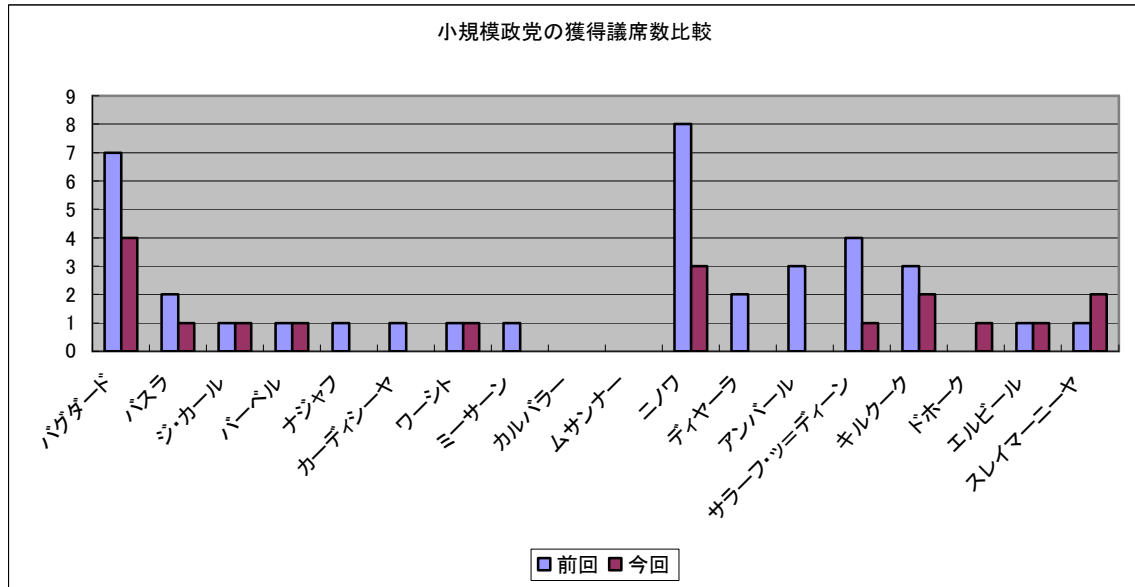
宗派・民族を代表しないイラク国民リストとしては、宗派・民族への政治的帰属意識を薄め、イラクが必要とする国民融和と米国の支援を獲得できる政党であることをアピールする必要があった。特に、確固たる基礎票を多く有するわけではないイラク国民リストとしては、前回選挙でシーア派を代表する UIA に投票することを逡巡したスンニー派層からの得票が減少することが予想される中、イラク国民リストの長所が受け入れられるか否かがポイントとなったように思われた。このアピールを最も受け

入れる可能性を有していたのは、大都市の浮動票層であったといえようが、結果として浮動票層を取り込むどころではなかった。スンニー派が居住する地域で議席を失ったことは予想通りとして、バグダードならびにバスラでも大きく議席を失ったのであった。浮動票層の選択は、イラク国民リストではなかったのである。イラク国民リストに融合した小規模政党はそもそも、共産党を除いてしっかりとした基礎票を有する政党ではなかった。このためおそらく、これらの政党が融合しても、イラク国民リストの中に埋没し、票の積み増しが限定的であったと考えられる。また、イラク国民リストが勝利する場合には、国民融和に向けて比較的望ましい環境が作られるとは考えられたものの、イラク国民の多くは、将来のことよりも目先の安定を優先させたのではなかったのか。UIA傘下の政党の民兵が治安機関に果たす役割が大きいことは前述の通りだが、もしもイラク国民リストが政権をとる場合には、これらの民兵の排除を始めとして、各省で混乱が起きる可能性すらあった。

今回初めて、主要なスンニー派政党が選挙に参加した。スンニー派のまとまりのなさは継続したが、スンニー派住民としては、初めて宗派を代表するある程度の影響力を期待できる政党が出てきたことで、投票先を得ることになったのであろう。



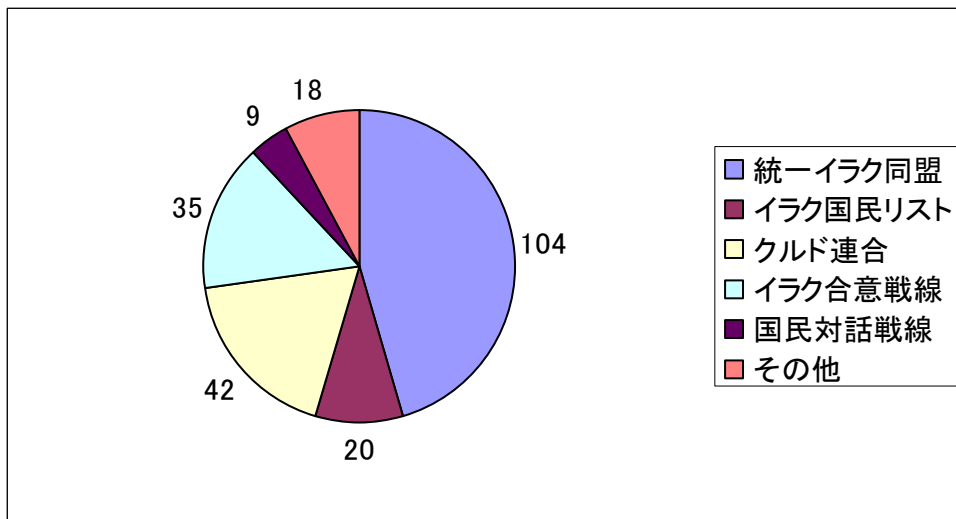
スンニー派政党の獲得議席は、前回小規模政党が失った議席、バグダードならびにニノワ県でイラク国民リストならびにクルド連合がそれぞれ失った議席を足した分にほぼ等しい。つまり、与党を構成する政党にはほとんど影響を与えなかったと言えるのではないだろうか。この意味で、競合したのは、前回の浮動票層とイラク国民リストであった。スンニー派の伸張の結果、イラク合意戦線と国民対話戦線は、併せてクルド連合と匹敵する勢力となり、今後の政局に影響を及ぼす会派となり、今後の政治の動き次第では、きわめて重要な勢力となる可能性を残した。



4. 喫緊の問題

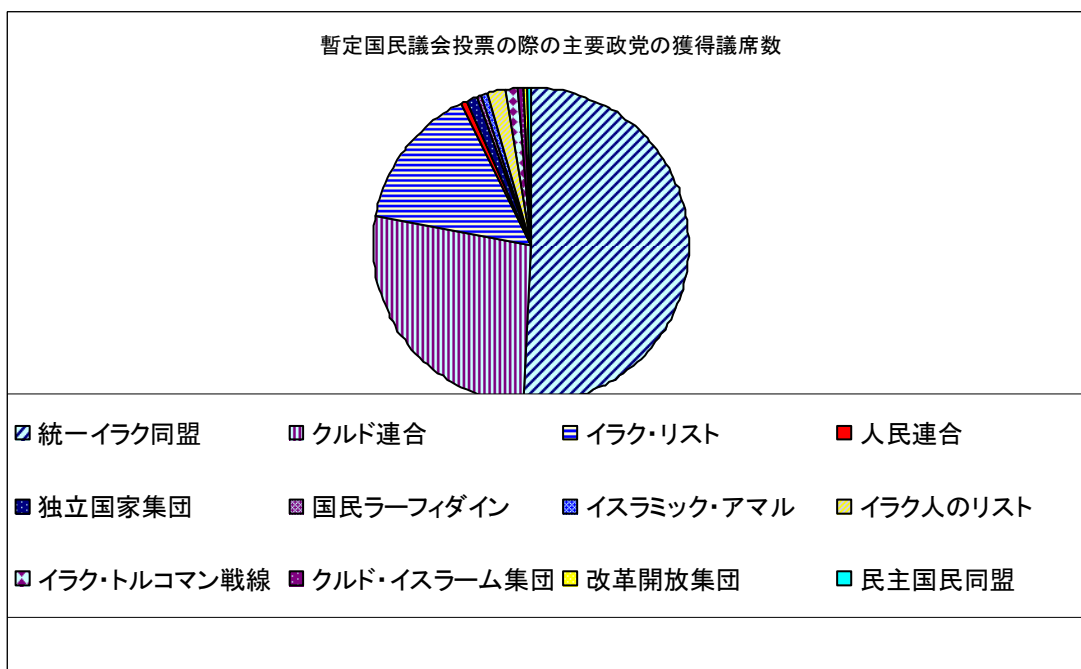
議会選挙の実施は、当然のことながらすべての問題を解決しない。喫緊の課題としては、政権の樹立がある。憲法の規定によれば、議会は三分の二の賛成をもって大統領評議会を選出することになっている。三分の二の賛成を得られない場合には、上位二名の決選投票となり、多数を獲得した方が大統領を選出する。この規定にしたがえば、最低でも過半数を抑える必要がある。

表) 12月20日独立選挙管理委員会発表に基づく獲得議席数



中間発表を基にした議席数予測では、過半数を単独で占める会派はない。予測どおり

に推移する場合には、連立政権を形成することが必要となる。連立を形成する際には、国民融和や地域的なバランス等、考慮すべきことは多いだろうが、最低限、クルド連合を取り組むことが必要になるのではないだろうか。政府の樹立は2月までずれ込む可能性もあるが、政権樹立後には、憲法の修正、再度の国民投票が見込まれている。その際には、再びクルドの実質的な「拒否権」があるために、クルド連合を取り込まない場合には、政治プロセスが振り出しに戻る可能性すらある。



連立政権の軸になる可能性がもっとも高いのは、過半数に近い得票が見込まれる UIA とクルド連合の連携であろう。両者は現在の与党でもあり、つまりはこれまでの政治的枠組みが維持される可能性が高いと思われる。宗教化の傾向が高い UIA 主導政権ができるとしても、現状と同様に、米軍を始めとする多国籍軍即時撤退が求められる可能性は高くはない。その一方で、スンニー派のイラク合意戦線が UIA に近づく等の動きが見られたとしても、やはり現状と同様に国民融和には時間がかかるかもしれない。しかし、軍や治安機関等の暫定政府の「遺産」を最も引き継ぎやすいのはこの連立政権であろう。

UIA が過半数に近い議席を占めるとしても、それは必ずしも UIA 主導政権の誕生を意味しないかもしれない。石油相のポスト争いを契機に発生した UIA 主流派とファディーラ党の摩擦は現在でも尾を引いているどころか、深刻になっている。暫定国民議会の議席数で UIA の 5 分の 1 を占めるファディーラ党が、選挙後に UIA から脱退する可能性は決して低いものではない。もしもファディーラ党が UIA から脱退する場合には、UIA 以外の会派が連立政権を組み、UIA 以外のほとんどの会派が参加する

連立政権が誕生する可能性は皆無ではない。このような会派は、スンニー派取り込みを含む国民融和を実現する上ではプラスの政権となるかもしれない。その一方で、UIAの影響下にある治安部隊をどう処遇するか等、直ちに直面するであろう問題は大きいかもしれない。場合によっては、内戦の可能性すら現れるかもしれない。最後に、国民融和に向けた大連立の可能性も考えられる。この場合、スンニー派政党やイラク国民リストの参加が前提となろう。しかし、暫定国民議会選挙後、内閣成立までに約3ヶ月を要した前例に鑑みれば、連立政権内でのポスト配分等は容易な問題ではなく、真の融和と安定には、乗り越えるべきハードルは高く、多い。

イラクにおける議会選挙は実現したが、政治的安定とそれに引き続くことが期待されるイラクの安定には、まだまだ多くの課題が残されている。イラクの政治的安定は、この意味でも自衛隊を含む多国籍軍駐留問題とも密接に絡み合う問題であり、ひいては、米政権の安定にも大きな影響を与える可能性が高い。また政治的安定なしには、石油の増産を含めた経済復興にも影響が及ぶことは必至である。